

カンタータ第 140 番《目覚めよ、と我らに声が呼びかける》BWV140

小川 与半・著

今回取り上げるこのバッハの有名なカンタータは、「マタイ受難曲」と非常に音楽的に関連が深いものがあります。最大の理由はその題材となっているコラールの歌詞が、「マタイ受難曲」が取り上げている部分の直前の、ある例え話に由来するからですが、このカンタータはそのコラール旋律に相応しい明るさと、1730年代の彼の作品に見られる一種独特のゆとり、味わいの深さまでもが感じられる作品です。

演奏に必要な編成 独唱3（ソプラノ、テノール、バス）、合唱4部、ホルン、オーボエ2、オーボエ・ダ・カッチャ（今日ではイングリッシュ・ホルンがこれに相当する）、ヴィオリーノ・ピッコロ（普通のヴァイオリンより3度高く調弦される小型ヴァイオリン）、弦、通奏低音
*ホルンとヴィオリーノ・ピッコロは省略されることがしばしばあります。

演奏される機会と初演日 三位一体後第27日曜日。この日は復活節が3月26日以前に繰り上がった年にもみ出現する日曜日で、バッハの存命中には1704年、1731年、1742年の3回しかなく、この作品の成立が1731年であることは、聖トーマス教会に所蔵されている（バッハ自身と彼の弟子たちによって作成された）オリジナル・パート譜の（MAという透かし入り）用紙と書体から推定されています。

その日の礼拝時に朗読される聖書章句 マタイ伝第25章第1～13節にて語られるイエスの例え話（以下「聖書」新改訳1970年より引用）。「そこで、天の御国は、たとえば言えば、それぞれがともしびを持って、花婿を出迎える十人の娘のようです。そのうち五人は愚かで、五人は賢かった。愚かな娘たちは、ともしびは持っていたが、油を用意しておかなかった。賢い娘たちは、自分のともしびといっしょに、入れ物に油を入れて持っていた。花婿が来るのが遅れたので、みな、うとうとして眠り始めた。ところが、夜中になって、『そら、花婿だ。出迎えに出よ。』と叫ぶ声が出た。娘たちは、みな起きて、自分のともしびを調べた。ところが愚かな娘たちは、賢い娘たちに言った。『油を少し私たちに分けてください。私たちのともしびは消えそうです。』しかし、賢い娘たちは答えて言った。『いいえ、あなたがたに分けてあげるにはとうてい足りません。それよりも店に行って、自分のをお買いなさい。』そこで、買いに行くと、その間に花婿が来た。用意のできていた娘たちは、彼といっしょに婚礼の祝宴に行き、戸がしめられた。そのあとで、ほかの娘たちも来て、『ご主人さま、ご主人さま、あけてください。』と言った。しかし、彼は答えて、『確かなところ、私はあなたがたを知りません。』と言った。だから、目をさましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないからです。』

歌詞作者 不明。

譜面の伝承 自筆総譜は長男ヴィルヘルム・フリーデマンに分けられましたが、金使いの荒さから貧困に陥り、当座の生活費を得るために競売にて売られてしまい、現在行方不明です。前述のオリジナル・パート譜は妻のアンナ・マグダレーナに分けられ、こちらも貧困のために売られましたが、その相手がライプツィヒ市であったため散逸を免れました。

使用コラール フィリップ・ニコライ(1599)全3節。歌詞の内容は上述の通りですが、旋律の方はより古い歌の旋律を借用したものらしいことが分かっています。更には第1行の旋律がニコラウス・デチウスの"O Lamm Gottes unschuldig"「おお神の子羊よ、罪無くして」(1542年作、「マタイ受難曲」序曲で歌われるコラール)や、"In dulci jubilo"「優しき喜びのうちに」(1503-31?)の第1行の旋律との類似を指摘する人もいますが、特に後者はニコライがコラール最終節の最後を"in dulci jubilo"の言葉で締め括っており、単なる偶然ではないことを示しています。全12行からなる詩の構造を調べると、これまた「マタイ受難曲」第1部終曲のゼバルト・ハイドンの"O Mensch, bewein dein Sünde groß"「おお人よ、汝の罪の大いなるを嘆け」と同じ脚韻構造であることがわかります。

O Mensch...: a1 a2 a3 a1' a2' a3 b1 b1 b2 b3 b3 a3'

Wachet auf...: a1 a2 a3 a1' a2' a3 b1 b1 b2 b3 b3 a3'

したがってこれらの詩に付けられたコラール旋律の構造も、以下のような類似を見せています。

O Mensch...: a1 a2 a3 a1 a2 a3 b1 b1 b2 b3 b4 b4'

Wachet auf...: a1 a2 a3 a1 a2 a3 b1 b1 b2 b3 b4 a3

バッハの作品に詳しい方なら、彼の作曲によるカンタータ第1番「暁の星のいと美しく輝きしかな」にて取り上げられている同名のコラールがやはりフィリップ・ニコライの作で、脚韻構造・旋律構造とも殆ど同様であることをご存じでしょう。

それでは次に各曲を眺めてみましょう。合唱の分担は第1・4・7曲ですが、ここでは全体を一望するために独唱曲についても触れることにします。

第1曲 コラール (合唱) [コラール第1節] 変ホ長調

そういうわけでこのカンタータ序曲は「マタイ受難曲」第29曲(第1部終曲)と構造的に非常に類似しています。序奏でリトルネルロ主題が3つ登場しますが、それぞれに意味付けできるようです。

①弦とオーボエ系木管が付点リズムを12回繰り返すのは、歌詞第1節第3行を先取りして真夜中の時刻12時を示すためである。

②続くヴァイオリンIとオーボエIIが奏すシンコペーション主題はコラール旋律第1行の最初の3音に関連しており、娘たちが花婿を迎えるために進み出でる様子を示す。

続くヴァイオリンの16分音符の上昇音形に対しては明解な説明はなされていないようです。

第2曲 レチタティーヴォ (テノール)

このカンタータにおけるテノール独唱は見張りの役割を持ちます。形式的には通奏低音のみを伴うセッコ・レチタティーヴォ形式であるため、「マタイ受難曲」の福音史家を連想する方もいらっしゃることでしょう。歌詞は花婿が目に見える所まで近付いたことをシオンの娘たちに知らせる内容が、聖書の章句の一部をふまえつつ歌われます。

第3曲 二重唱アリア (ソプラノ、バス) 八短調

賢い娘の一人に例えられた人々の魂(ソプラノ)と、花婿に例えられたイエス(バス)との間で交される、最初の二重唱です。ヴィオリーノ・ピッコロによる技巧的な助奏が、短6度の上行跳躍音型—「哀願」の象徴を主題とする構成は、「マタイ受難曲」第39曲の有名なアルトのアリア"Erbarme dich, mein Gott"「憐れみたまえ、我が神よ」を連想します。しかしこの二重唱が描くのは悲しみではなく期待に伴う不安で、魂はイエスが早く来ることを願い、イエスは自らの到着を魂が早く気付いてほしいと願う歌詞を歌う点に「哀願」の音形の必要性が現われています。

第4曲 コラール（テノール）【コラール第2節】変ホ長調

弦が奏するリトルネルロ主題は、音程が上がったり下がったり、あたかも見張りが遠くに近くに目線を動かす様子を描いているかのようです。このような音形は「見張りの動機」と言えるのではないのでしょうか。同様の例がやはり「マタイ受難曲」第20曲のオーボエ助奏にあります。このカンタータを知らなかった方も、この曲には聞き覚えがあるのではないのでしょうか。実はこの曲は後にバッハ自身の手でオルガン独奏用に編曲されており、バッハの作品としてはこのオルガン版の方が有名なためです。

第5曲 レチタティーヴォ（バス）

「マタイ受難曲」を知る人ならば、バスの弦伴奏付きレチタティーヴォはイエスの言葉の象徴であることを思い出すでしょう。ここでは花婿たるイエスが、花嫁たる魂（この曲では歌詞にも"Seele"「魂」の単語がはっきりと現われる）を受け入れる内容が歌われます。

第6曲 二重唱アリア（ソプラノ、バス）変ロ長調

2度目の二重唱は、魂とイエスがお互いの出会いを喜ぶ様子を明るく歌います。この種の二重唱はバッハの得意技のひとつのようで、世俗カンタータ第213番にてヘラクレスと美德（の神）が互いの合一を喜ぶ二重唱である第11曲（後に「クリスマス・オラトリオ」第3部第29曲に転用された）などの名曲があります。ソプラノの"Mein Freund ist mein"「私の友は私のものとなった」という言葉に対して、バスが答える言葉は旧全集準拠版では"Und ich bin dein"「私はお前のものとなった」であるのに対し、新全集準拠版では"Und ich bin sein"「私は彼女のものとなった」となっています。

第7曲 コラール（合唱）【コラール第3節】変ホ長調

題材となったコラールが最も簡素な形で登場します。いくつかの例外はあるものの、各行間に休符が置かれたこの形は、プレトリウスが1604年に同コラールを伝えた時の形に近いものですが、この休符は以外と当時のコラールの一般的な歌われ方を示すひとつの例かもしれません。

参考文献：NORTON CRITICAL SCORES "Cantata No.140" Edited by GERHARD HERZ